

# 学校施設基本計画作成プロセスへの教師参加の課題

※  
— 個々の学校施設と教師の施設認識との関連から —

帝京大学 堀井啓幸

## 序

本稿は、学校における教育活動の効果的達成をめざす学校経営のサブシステムとしての（あるいは、時にはそうした学校経営を阻害する物的条件となる）学校施設のあり方を、個々の学校施設状態、教育活動との関連の中で模索しようとする一連の試みである。特に今回は、まず学校施設基本計画作成プロセスへの教師参加の意味を考察し、次に望ましいとされる学校施設基本計画作成プロセスへ教師が参加するための前提課題とでもいうべきものを、オープンスクール<sup>※※</sup>を比較の視座に置いたケーススタディから考察した。

### ※ 学校施設（物的施設）

いわゆる広義の学校施設とは、『学校施設の確保に関する政令』第2条第2項にいう「学校の建物その他の工作物及び土地」、『学校教育法施行規則』第1条第1項にいう「学校の目的を実現するために必要な校地、校舎、校具、運動場、図書館又は、図書室、保健室その他の設備」すべてを含めうるが、従来、教育サイドでは、学校の建物等の基本設計について考慮されず、教室環境の具体的構成、工夫の域をでなかったという観点から、筆者は、特に校具等いわゆる設備を除いた学校の不動的な構成物に焦点化している。本稿では、さらにその中でも、教室及び教室まわりの施設について着目した。

### ※※ オープンスクール（施設レベルでの定義）

オープンスクールとは、本稿では、大なり小なりオープンスペース（以下O. S.と略す）を持った学校をさすが、一口にオープンプランスクールといってもタイプは様々である。

長沢氏<sup>(1)</sup>らは、

- A、特定の学年又は教科など、あるまとまりに帰属しているもの
- B、学年全体に帰属しているもの

に、大きく分け、さらにこれらをオープンスペースの位置、用途によって幾つか分類している。

関沢氏<sup>(2)</sup>は、教授方法の変化と関連させて

- A、宮前小学校のようなクラスルーム・ユニットとしての系列
  - B、板橋区立稻荷台小学校のような学年別ユニットプランとしての系列
- に分類している。

厳密に言えば、個々のタイプのオープンスクールそれぞれについてケース研究を行い、構造的枠組を持った精緻な調査を行われなければならないが、本稿でとりあげるオープンスクールは、ワークラウンジを持ち、その意味においてセミ・オープン化された小学校（長沢氏らの分類では、廊下を広げた形のO. S.をもつ学校）とコンパクトな造りながら、在来教室の4倍の面積を持つO. S.や学習センターを有する、施設的には、ほぼオープン化が達成されたと考えられる小学校をとりあげる。

## I 現代学校施設の課題と研究の視点

### (1) 現代学校施設の課題とオープンスクール

第2次大戦後、教育課程、教育方法分野では、子どもの自主性、自発性を生かし、子どもひとりひとりを大切にすることが、様々に試行されてきた。しかしながら、依然として知識偏重の一斉画一化であるという批判がたえない。一方、学校における組織的な教育活動に必要な物的条件としての学校施設も、木造建築が鉄筋コンクリート造に置きかえられ、机や椅子等の学校用家具も人間工学等により改善されるなど、その意味では、戦後見違えるほど立派になったといえよう。が、しかし、外見上立派になったとしても、教室等の平面計画においては、明治後期以来、北側に廊下があり、「4間×5間」の教室が一列に並んでいるような形態にはほとんど変化がない。現在では、小中学校施設の木造比率は、昭和54年5月1日現在で、22%となり、急速に鉄筋コンクリート造校舎に置きかえられた結果、一度造ったらその構造をかえることができないという性格を構造的にも、使い手側の心理的にもいっそう強めている。

そうした学校施設のマンネリ化傾向のもとで、全国に散在するいわゆるオープンスクールにおける実践研究、昭和55年度からの文部省を中心とした「学校施設の文化的環境づくり」に関する調査研究、さらには、昭和57年1月の「豊かな心を育てる施策推進会議」設置、昭和57年4月から始まった「豊かな心を育てる施策推進モデル市町村の指定」等は、従来の、質よりも量を重視した教育の物的条件整備から、質を重視したそれへの転換を図るものとして注目されている。

特に「学校施設の文化的環境づくり」等の国の試行は、従来の、教育論としてよりも財政的な側面からの規定が強く作用しやすい画一的な学校施設作りから、教育論的立場にたつたゆとりある個性的な施設作りを志向するものとして、相応の評価が可能である。しかしながら、ここで目ざされている「文化的要素の付与」が、個々の学校施設に具現化されるためには、むしろ障害の方が大きいと思われる。まず考えなければならないのは、やはり財政的裏づけの不足している点であろうが、それ以前の問題として、この中で目的とされている「豊かな心」<sup>(3)</sup>が、果して施設の工夫をしたことによって可能になるのか再考すべきである。従来、学校施設の問題は、「教室環境の経営以前の問題」<sup>(4)</sup>であり、教育との関連において、教育サイドにおいては、たとえ施設の重要性は叫ばれたとしても施設論はなかったといってよい状態であった。その状態の下では、たとえ学校施設の文化性の観点は、教育機器とは違って存在的（地理学的）影響力が大きいとしても、O. H. P. が埃をか

ぶっている学校が少なからずあるのと同様に、教育活動と有機的な関連をもたない単なるモノになってしまう可能性も大きい。そこには、「豊かな心」とは何なのか、豊かな心と施設の関係が明確でないために、そう言いきるには抽象的すぎる。

そもそも、こうした「学校施設に文化的要素を加えるための方策」と、本稿で比較のひとつの視座に置く学習システムのオープン化をめざすオープンスクールとは、建築計画をする際の具体的対象空間においては、必ずしも重ならないだろうが、理念的には、従来の画一的な知識偏重主義を反省し、児童生徒個々、固有の人間性を尊重しようとする点において一致すると思われる。

「豊かな心」とは、大局的なとらえ方をすれば、高久氏も述べておられる<sup>(5)</sup>ように「十分客観化され、文化化されながら、しかもなお、ひとりひとりに固有の独自性を持ち続ける人間性」であろう。つまり、学校施設に文化性を導入する場合においても、そこにはあくまで、子どもひとりひとりの固有の独自性を生かすという視点がなければならない。それゆえ、当然ながら「文化的要素を有する学校施設」という無機的存在は、その目的を達成するためには、個々の学校の教育と連続性を持った有機的存在とならねばならない。

オープン化された学校施設で行われるオープン教育の是非については、改めて論及しなければならないが、「子どもひとりひとりを生かす教育をするためには、従来おろそかにされてきた子どもの自主性を尊重し、学び方を学ぶ態度を育てることが必要であり、そのためには、オープンスペースが重要である」という、オープン教育実践校の学校施設に対する提言<sup>(6)</sup>は、今後の学校施設のあり方について、教育活動との関連で考察する場合、ひとつの傾聴すべき意見である。

なお、オープンスクールは、学校施設計画がよく行われている場合が多いため、クラスの固定壁を取り除くという意味でのオープン化以外にも、色彩、多学年の交流が可能なコモンスペース、その他、教育実践レベルとの関連がある、地域ボランティアの利用、地域の歴史風土がひと目でわかるコーナー作り等「学校施設の文化的環境づくり…」における「目標設定」<sup>(7)</sup>であげられている諸観点を満足しているものが多いという理由から、先ほど問題点として述べた後者の問題、「豊かな心」が果して施設の工夫によって可能なのか、学校教育活動との関連の中で、「豊かな心」を育成するという教育目的と有機的関連を持った物的条件を考察する、よい対象となることが期待される。

個々の学校教育との関連において、学校施設のあり方を模索する場合、個々の学校教育に対する評価はさけられない問題であるが、本稿では、特に、学校施設基本計画プロセスへの教師参加の課題を探るために、それぞれの学校施設に対する教師の施設認識に焦点化し、現時点においては、オープン建築が基本的に有する、将来にわたって学校の教育における方法手段の選択の幅を広げることが可能であるというフレキシビリティの要素を評価するに止めたい。行政、建築、教育関係者の、三者の協議で学校建築計画を進めようと試みたS市の設計者がいうような、「この学校は、オープン教育をさせるために造ったのではなく、先生方がオープンはいやだと言えば、従来通りの教育をやってもいいのであって、建物の本来の姿に戻っただけである」<sup>(8)</sup>という意味のフレキシビリティである。

## (2) 研究の視点と調査の概要

学校施設の重要性について述べられた論文は少なからず存在する。教師の施設認識をアンケート形式で収集し、今後の学校の物的条件整備に役立てようとする、全体的な調査もなされている。理想的に言えば、学校施設は、明らかに教育活動を阻害するものでない限り、個々の教育活動により、その有効性も異なるものであり、個々の学校経営と有機的関連をもつべきである。しかし、現実問題としては、「どんな状況のもとでも、その状況に即して様々に努力し、それを打開し、道をあけていこうとする」<sup>(9)</sup>教師の理想的教育実践の一側面は、お上から与えられた施設をありがたくいただき、できあがった施設の範囲内で創意工夫をするという意識を不当に強めてしまったのではないだろうか。そのために、教師の施設認識についても学校施設がすでに潜在カリキュラムの役目を果たし、教師の基本的施設観（教育観にも繋がる）が規定されてしまうという側面もあると思われる。これらの点において、従来教育サイドで述べられた論文は、個別レベルの問題を捨象しすぎた観があるし、またアンケート調査においても、個々の学校施設状況、教育活動への関連性が薄いため、単なる現状分析に終わりやすく、今後の学校施設のあり方について具体像を示しえないのではないかとと思われる。

そこで、筆者は、(1)で述べたように、学校施設のマンネリ化を打破するものとして現われつつあるオープン建築を一つの視野にいれながら、個々の学校の実態調査を行い、学校施設と教育との関連を分析し、将来の学校施設のあり方について検討していきたいと考えている。学校施設のあり方を教育との関連で述べる場合、当然のことながらまず、子ども自身の理解が必要であり、子どもにとって魅力的な施設のあり方を模索すべきである。特に筆者が、本研究を進めるにあたって、視座に置いているオープン建築におけるオープン教育については、賛否両論あり、現時点で良し悪しの判断をつけることは困難である。その意味で、筆者のオープン建築に対する現時点での評価は、(1)において教育活動における評価に及ばない範囲で簡単に表明してあるが、今のところオープン建築は学ぶべき点は多いものあくまでも比較すべきひとつの視座である。

学校施設のあり方について研究する分野は、本来、直接的には、教育側の要望を適切な形で建築条件に翻訳するという意味での建築計画学と教育課程、教育目的との関連の上になつた教育方法学が関与すべき問題であろうが、さらには教育方法も含めた個々の学校経営体制、また実際にオープン建築が作られる過程からみれば、建築行政主導型が多く、今後教師が学校施設基本計画作成プロセスに参加することが望まれていることから、教育行政、学校経営分野の問題でもある。学校に存在する様々なインターアクション（教師対児童、児童間、児童と教材間等）のあり方についての研究は、教育方法学等の成果、今後の筆者の学校調査の積み重ねの中で改めて問いながら、本稿では、まず学校施設、教育活動についてそれぞれ特徴をもった幾つかの学校調査データから、特に使い手である教師の施設認識に焦点化し、施設認識の問題から、今後教師が学校施設基本計画作成プロセスに参加する際の前提条件なるものを探してみたい。

学校調査は、校長（教頭）あるいは教務主任を中心とした先生方へのインタビュー形式の意見聴

取、設計者、教育委員会の担当課の方々への意見聴取、授業観察（調査員2～3名による中学年授業の観察－タイムテーブルにそった授業内容記録、教師児童の移動記録、施設設備、掲示物の記録）及び校内の観察による。特に、今回資料としたアンケート調査は、O小学校、H小学校、K学園に勤務する先生方に御協力をいただいた。また、57年度には、東京大学長沢先生、東京都立大学上野、諸貫先生らを中心とした、建築計画学の立場からオープンスクールを研究しているグループの調査に参加させていただいた。紙数の関係で、調査の細目まで吟味していただけないのは残念であるが、前記3小学校を除き、学校観察をさせていただいた小学校は以下の通りである。（予備調査のみの小学校も含む）。

島田市立初倉小学校	札幌市立丘珠小学校
東浦町立緒川小学校	日本女子大学附属中学校
〃 〃 卯ノ里小学校	〃 〃 〃 高等学校
桜村立栄小学校	
笠間市立稲田小学校	
	等

## II 教師の学校施設基本計画作成プロセスへの参加の必要性

### (1) 学校施設基本計画作成プロセスの現状

学校施設を作るプロセスという側面から、現在の学校施設の状況をとらえてみるならば、公立学校の場合、一応企画→設計→施行というプロセスがとられるが、「教育委員会と自治体の建築課シングルラインの図で計画を終え、実施設計図の作成のみが外注される例が一般的」<sup>(10)</sup>であるため、教育委員会あるいは自治体がよほど積極的に学校施設の計画をした場合を除いて、個々の学校施設を作る際に「建築の企画をうけて、そこに定められた目標の達成に向けて条件を整理し、大筋の方針を定め、建築の具体的なイメージを構想し、さらにその実現手段を策定する」<sup>(11)</sup>というような建築計画もほとんど存在しないし、もちろん教師が基本計画作成に参加するプロセスなど設定されていない場合が多い。その結果が前述したようなマンネリ化を学校施設にもたらしている一因となっている。

また、ある小学校の管理権を有する施設課の方が、その学校について「学校自体は機能的にすばらしい建物であるが、割れたガラスを取り換えるのに消防署のレインボー部隊が出勤しなければならない等維持費がかかりすぎる」点を指摘していたが、学校施設を作る際、前述したようなプロセスがとられやすいのもこうした財政的問題による。学校施設は、それ自体、建築するために非常に多額の予算を必要とし、現実問題として建築の1㎡当りの単価が、公共予算と国庫補助基準の枠で締めつけられている。それゆえ、昭和42年から4回にわたって作成、改正されてきた文部省管理局教育施設部による学校施設設計指針も法的拘束性を伴わない空文と化し、昭和53年改正のものに至っては、学校施設設計指針の位置づけすら記載されていない<sup>(12)</sup>。

現在、国はもとより、地方自治体の財政再建がとらえられており、学校施設の質を重視する指導

に反して、単に財政的問題として片づけられてしまう危険も大きいのである。

しかしながら、地方自治体行政への計画性導入が重視されているなかで、与えられる建築条件や内容も複雑、多様化し、鋭意な建築サイド研究者の指摘とも相俟って、学校施設における基本計画の重要性が問われてきたことも事実である。実際に幾つかの自治体では、「標準設計」によらない基本計画が作成されているが、試行段階であり問題点も多い。

## (2) 教師参加の必要性和その課題（幾つかの具体例から）

Iの(1)で述べたような国レベルの「学校施設の文化的環境づくり…」等の調査研究あるいは施策は、学校施設の量的整備から質的なそれへの転換、地域社会における役割の再認識を図るがゆえ、そこで求められる施設の文化性が、個々学校の教育活動と有機的な関連をもって付与されたならば、従来の、知識偏重主義と結びついた人間的疎外感を増幅しやすい、単なる学習する場としてだけみる学校観から、地域コミュニティとも連続した児童生徒の生活の場としても、個々に固有な意味を持つ子どもの多様な発達可能性を育くみやすい場とみる学校観に転換することが可能である。そのためには、財政政策レベルにおいては、「教育投資論的背景をもつ」<sup>(13)</sup>現在の補助基準における「利用率理論を子どもの発達論的見地より根本的に転換させていく必要」<sup>(13)</sup>があると思われるが、一方、文化的施設が、教育活動の中で真の意味の文化性を子ども達に植えつけるためには、個々の学校施設を作る際の基本計画作成プロセスの中に、使い手の立場にあり、子ども達の教育に専従する立場にある教師を参加させることが重要である。

実際に、現在あるオープン建築について、それが行政建築主導であるために、それへの反発からオープン建築が生かされていない例もあると聞く。従来、施設的な障害もあって採用されにくかった多様な教育方法を含む学校経営戦略が考慮された上で、従来通りの教育が行われる場合はいいとしても、行政建築主導であるがための反発から、オープン建築のもつフレキシビリティが生かされないのは残念なことである。

また、廊下のない「両面採光の教室」をもつ幾つかの学校の校長（教頭）先生からは、「この作りでは管理がしにくい」という意見がでている。「管理」という言葉のもつ、教育における主体性の力点の置き方については多少問題があるとしても、「入り組んでいるためにケガが多く、また掃除がしにくい」という意味での指摘は、できあがった施設を何十年も使っていく側では、由々しき問題であり、設計者と教師の間に施設設計意図について意志疎通が図られていない多くの場合も含めて、明らかに教育実践レベルにおける建築サイドとのズレを感じざるをえない。

このようなギャップは、学校施設基本計画の作成によって、設計者、行政関係者、教師間における協議プロセスが設定されていれば、ある程度の改善策もたてられたのではないと思われる。

しかし、である。第7巻でも述べたように単に、教師が学校施設設計プロセスに参加するだけではこうしたギャップは解消できないことも事実である。現実問題として、このような協議プロセスを設定しても教師からはほとんど意見がないと聞く。教師の仕事は、授業計画から集金等の教務事務、校務事務等多岐にわたっており、量も多い。そうした状況のもとで、将来にわたる学校施設の

有様まで模索することは難しい。特にオープン建築については、出現してまもないものであり、オープン教育に対する評価もまちまちであるため、実際に自分自身で使用してみないと意見は述べられない。また、Ⅰの(2)で述べたように、教師の理想的教育実践の一側面や諸々の財政的問題による施設改善要求の潜在化によって、学校施設に対する意見が限定されるのも事実であろう。

しかし、本当に教師からは意見がないのであろうか、ここでまず調べてみる必要がある。たとえ、一斉授業の中で個を生かす試みのなかでも、従来のマンネリ化した学校施設の問題点はそれなりに存在するはずであり、個々の学校レベルにおいては、いっそう多様な問題を有していると思われるのであって、まず施設認識の問題を押えながら、個々の学校レベルにまで立ちいって、それぞれの学校の教育活動との関連のもとで、教育の効果を最大にするための学校施設のあり方、教育過程にかかわる要因との相関を検討すべきである。

そこで、Ⅲ、Ⅳにおいて、すでに学校施設を使用している段階での調査ではあるが、施設的にも教育的にも特色をもった3小学校の使い手の立場にある教師の施設認識から、ケーススタディとして、具体的に学校施設計画作成プロセスへ教師が参加するための前提課題というべきものを考察した。

### Ⅲ 学校施設と教師の施設認識レベルの関連

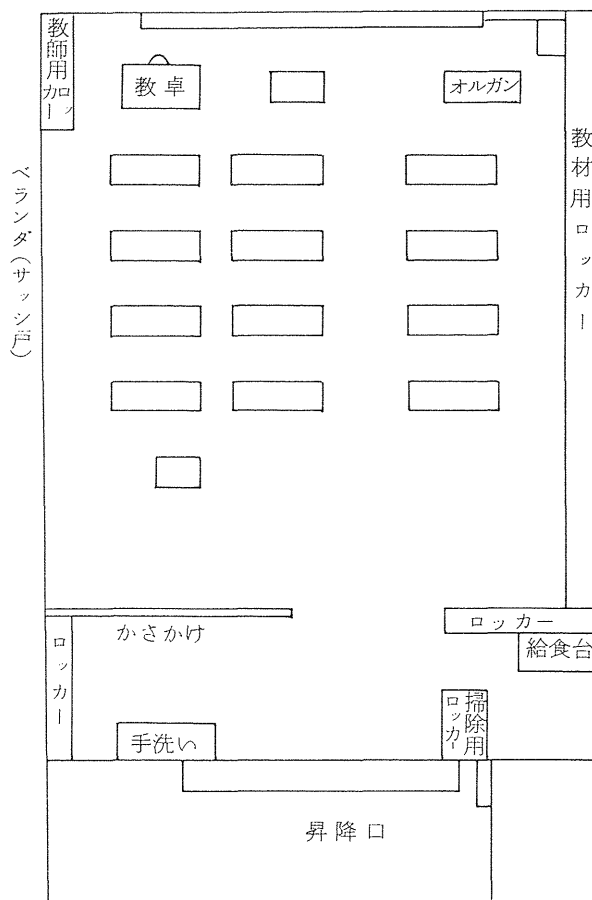
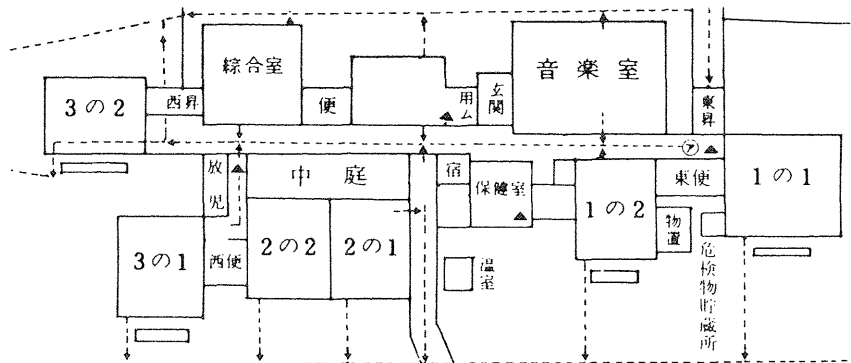
#### (1) 3小学校の概要と位置づけ

学校観察及びアンケートをさせていただいた3小学校の概要を、(建築年)、④学校施設の特色、⑤学校経営の特色という3つの観点からまとめると以下のようになる。

#### 0 小学校(昭和39年新築)

④、6ユニットのブロック構成、室内環境の徹底的改善・機能性の追求(採光量調節可能な天窗、生活用スペース、子ども達の人体寸法にあわせた展開設計等)、クラスルームの独立性の尊重(学年ごと異なった空間を与える)、低高分離(調査時点では、1年生の玄関と2～3年生の玄関が分離されていることになる)、その他、総合室、図書館等特色を持った空間が作られているが、調査時点では当初の目的通り使用されていなかった。

⑤、特にないとのことである。

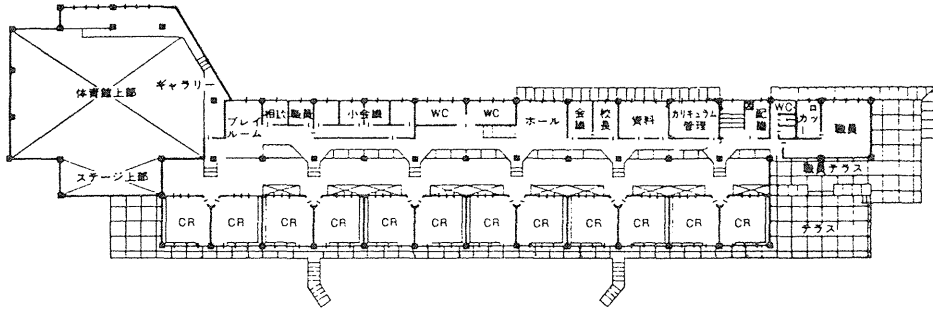


3-1 図 ○小学校構成図及び3の2教室平面図  
 (学校経営概要校舎案内図より転用，教室平面図は縮尺1:100)



H小学校（昭和45年新築移転）

㊦，分散O. S. としてのワークラウンジ設置，児童の動線を考慮した教室配置，低高分離。



3-2 図 ワークラウンジをもつH小 2 F平面図  
（学校施設資料集9 P12 より転用，縮尺1:1200）

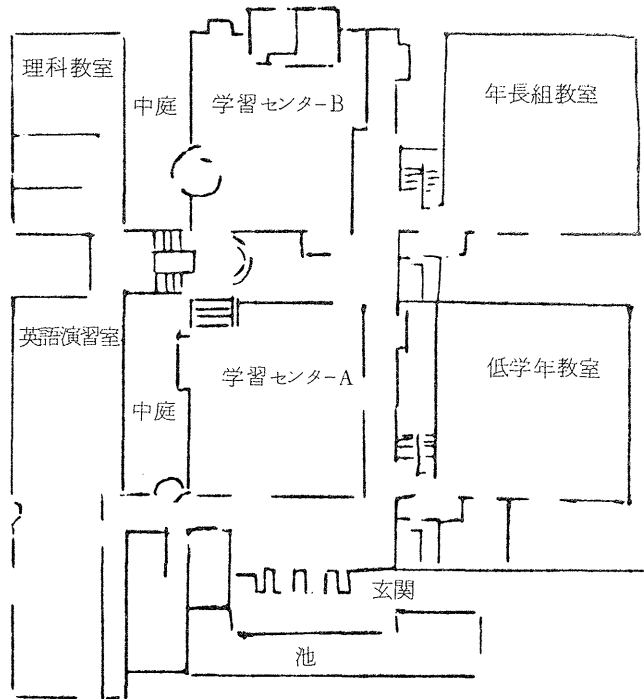
㊦，カリキュラム管理室を中心とした学年・教科経営，教育機器による大集団学習システム・自学自習システム・授業研究システム・ミュージックラボラトリーシステムの充実，学年会及び教科グループを中心としたチーム・ティーチング，統合学習，独自プランの作成及び実施。

K学園初等学校（昭和47年新築）

㊦，オープンプランシステム  
の校舎，O. S. のクラスルーム（在来教室の4倍の面積と絨毯を敷きつめてある）

㊦，2学年1組となったO. S. でのT. T.（チーム・ティーチング），モジュラスケジュールシステム（1モジュラー15分を時間割の基礎単位とし，子どもの興味・進捗等を見て，流動的に時間割を組んでいく），ファミリーグループ（縦割教育），国際理解教育（幼児期からの一貫した英語教育）

今後の学校施設のあり方を  
考察する上で，これらの小学校  
を学校経営的特色及び学校



3-3 図 オープンプランシステムの校舎  
K学園1 F平面図（約1:720）

施設的特色から位置づけると次のようになろう。ただし、これらの位置づけは、仮の設定であり、今後多くの学校を調査する中で、遂次、修正を加える必要がある。

○小学校（公立）は、生徒数362名、学級数12の、文部省のいう<sup>(14)</sup>最適規模の小学校であり（調査時点）、他の2校と比較して学校経営的特色を特に有していないが、クラス担任制、一斉授業形態を基本にしながら、交換授業や奉仕授業または授業の中でグループ学習も取り入れていくという、全国の多くの小学校の典型的スタイルとみてよいと思われる。施設的特色は、特に認めていない教師も多かったが、クラスルームごとに異なった空間が与えられ、それぞれ生活用スペース、採光量調節可能な天窓等が設置され、室内環境の改善がなされている。従来のマンネリ化したパターンとは異なるものの、クラス間に存在する固定壁を取りはずす意味でのオープン建築とは、クラスの独立的空間を尊重する点において対極に位置する学校施設とみてよいと思われる。ただし、昭和39年に児童数は「長期にわたって終始する」<sup>(15)</sup>と予測していたものが、昭和47年には生徒増により、当初の施設では無理がでてきたため、昭和49年に増築している。アンケート調査でもこの点を考慮しているが、もともとサンプル数が少ないこともあって、統計的に処理するには問題が残った。また、教室内で授業しやすいという観点は、クラスの人数と教室面積が重要な要因となっていることが、授業観察等を通じて確認できたが、授業観察をさせていただいた3年2組は、7.50×7.00 mの空間（生活スペースを除く）に25名の児童に対し、例えばH小の場合、授業観察をさせていただいた4年5組は、8.00×8.00 mの空間に学級編制の標準限度の45名の児童が収容されている。施設認識レベルの比較をする場合、この点の考慮も重要である。

日小学校（公立）は、生徒数1622名、学級数42のいわゆる大規模校であり、戦後まもない頃から革新的な教育実践を行なってきた。ここでは、特に学校経営的特色として、カリキュラム管理室を中心とした学年経営、教科経営による協力教授体制が重要になろう。施設的特色としては、ワークラウンジを持つという意味で、完全なオープン化への過渡期的段階にあるもの（一種のセミオープン）としてみることができる。ただし、ワークラウンジの絨毯がすれて、ほとんど絨毯としての機能をもちえていないこと、ワークラウンジとクラスとの壁が、コンクリートの固定壁になっているために、視覚的にもクラスとの連続性が欠如されている等を考慮しなければならない。

K学園初等学校（私立）は、生徒数252名、学級は、つき（1年）、ほし（2年）、たいよう（3年）、うみ（4年）、にし（5年）、もり（6年）の6クラスあり、2クラスずつ1オープンスペース（在来教室の4倍の広さをもつ）を使用している。観察を行なったうみは、児童数38名に対し、男女教師それぞれ1名で教えていたが、協力授業により、学習プログラムは、初等学校の担任教員全員で作成するため、その意味では従来の学級担任とは異なる。開校当初からみると「フリークラス」と呼ばれるものがみられなくなり、その意味ではオープン戦略も縮小したかの感もあるが、オープン教育の代表的存在としてみてよい。施設的特色としては、3-3図に示すように、コンパクトなオープンプランシステムの校舎であり、2クラスが一緒になったクラスルームは、移動黒板やロッカー等があるものの壁は取りはずされている。ただし、○小同様、アンケート調査の

サンプル数が少ないこともあって、統計的に処理するには問題が残った。

(2) 教師の施設認識レベルの問題から

それぞれの小学校の施設に対して、教師はどのように認識しているのだろうか、調査に用いた質問は、次の通りである(3-1表)。

貴校の学校建築についてどんな点がすぐれていると思いますか。以下のうちで  
すぐれていると思う順に1, 2, …と番号をふって下さい。同じ程度だと思  
うものには同じ番号をふって下さい。以下にあげた項目は幾分おおまかにとらえ  
てありますので具体的事例を総合して判断して下さい。

( ) 子どもにとって安全に設計されている。  
( ) 子どもが学習しやすい。  
( ) 特別教室や運動場へ移動しやすい。  
( ) 教師が授業しやすい。  
( ) 教師の会議等使いやすい。  
( ) 建物の醸し出す心理的效果など魅力的な建物である。

↓

どんな点が魅力的ですか(例えば色)

( ) { } すべてにわたって特別優れているとは思われない。

その他 ( )

3-1表

各学校の教師の施設認識を比較しやすいように、品等的質問法をとった。結果は、3-2表に示す。

項目		得点							各項目に順位をつけた人数	
		7	6	5	4	3	2	1		
		1	2	3	4	5	6	7		
小	子どもにとって安全に設計されている		1	1	4.0		1	1	4	
	子どもが学習しやすい	1	3	5.5		2			6	
	特別教室や運動場に移動しやすい		2	4.8	2			1	5	
	教師が授業しやすい	4	6.0		1		1		6	
	教師の会議等使いやすい	1				1		2	4	
	建物の醸し出す心理的效果など魅力的な建物である	1	2	4.8	1		1	1	6	
	すべてにわたって特別優れているとは思われない。	4	1	5.6		1		1	7	
中	子どもにとって安全に設計されている		3	5	3.8	5	6	5	24	
	子どもが学習しやすい	13	6.1	5	8		1		27	
	特別教室や運動場へ移動しやすい	7	8	5.5	6	3	3		27	
	教師が授業しやすい	3	10	5.1	4	7	3		27	
	教師の会議等使いやすい	1	4	4	4.1	9	4	3	1	26
	建物の醸し出す心理的效果など魅力的な建物である	5	1	2	1	3.5	4	8	4	25
	すべてにわたって特別優れているとは思われない。	9	3		4.3			3	7	22
高	子どもにとって安全に設計されている	3	0	5.1	2	1	2		8	
	子どもが学習しやすい	6.8	6	1					7	
	特別教室や運動場へ移動しやすい		3	5.3	2	1			6	
	教師が授業しやすい	1			1	4.2	1	3	6	
	教師の会議等使いやすい		1				2.7	5	6	
	建物の醸し出す心理的效果など魅力的な建物である	2	5.7	2		2			6	
	すべてにわたって特別優れているとは思われない。							1.0	1	1

○印は、1位を7点、2位を6点……7位を1点と得点し、各項目の合計点をその項目に順位をつけた人の数で割った平均点である。

○印の得点が高いほど教師の評価が高いことを示している。

数値は、それぞれの項目に順位をつけた人の数を表わす。

3-2表 現在の施設についての施設認識

※順位得点はすべての項目に順位がつけられていない場合もあるし、同じ項目に同一の順位をつける人もいるので、その項目に順位をつけた人の中での尺度である。

学校施設のあり方については諸説あるが、筆者は、基本的には次のように考えた。学校施設も容器としての空間ととらえる場合と、場としての空間ととらえることができる。学校施設を容器としての空間ととらえる場合、基本的条件として、子どもがどこで、どんな学習、遊びをしようとも、安全でまた衛生的で（安全性）、魅力的（魅力性）でなければならない。また、場としての空間としてとらえる場合、子どもは学年により、学級により、グループまたは個人、いろいろな場に所属するが、子どもにとって、生活の場として、教育の場として、使いやすい（便利性）ことが必要である。このような観点を、日常レベルまで引き下げて、具体的な項目をあげていくと数多くの項目が設定できるが、その中で重複するものを省き、照明設計等今回の調査の目的からはずれるものを除き、さらに品等的質問上、選択肢をあまり多くできないという限定から考慮した結果、上記の7項目に落ちついた。「教師が授業しやすい」「教師の会議等使いやすい」という項目は、協力教授等の教科会議等も考慮して設定した。

サンプル数が少ない学校があること、順位づけ方にバラツキの大きい項目があること等統計的に処理した場合、不備も多い集計結果だが、我々の学校観察の結果に比べて、施設観に一致点が多いこと、それぞれの自由記述欄及び「子どもにとって好ましい学校建築とはどうあるべきか」という自由記述（結果については巻末に示した）に対して、具体的な建築のあり方を述べたものから、教育的理念的観点から抽象的に施設条件について述べたものまで様々な意見が多くだされたという意味で、教師の学校施設に対する認識は高いといえる。

〇小学校の場合は、教師の数が少ないので順位得点も分散している項目もあるが、3-2表が示すように、「すべてにわたって特別優れているとは思われない」という意見と「教師が授業しやすい」という意見の順位が高かった。

「すべてにわたって特別優れているとは思われない」という意見は、H小では、「優れているとは思わない」という人とその項目に順位を低くつける人との差が大きく、K学園では「優れているとは思われない」という意見は、ほとんど存在しなかった。H小において、意見がわかれたのは、自由記述欄より推定すると、ワークラウンジ等のユニークなスペースの配置に積極的な評価をするものと、風通しが悪い、騒音が多い等の状況に批判的な評価をするものに分れたためではないかと思われる。

「教師が授業しやすい」という項目は、他の2校と比較して、〇小学校が圧倒的に順位得点が高いが、「子どもが学習しやすい」という項目と重ねて比較すると、H小、K学園の場合が「子どもが学習しやすい」という項目の順位得点が高く、「教師が授業しやすい」という項目の順位得点、それより1～2点低くなっているのと、逆の傾向になっている。〇小の自由記述欄をみると、「他の教室を見ることができないので他に気をとられない」「教室が孤立しており、学級としてまとまりやすい」「個々吟味されて設計されている」という意見がそれぞれひとつずつあったが、このような独立した学級に対する満足度を表明した教師のうち2名が、「教師が授業しやすい」という項目に1位の順位をつけていた。サンプル数が少ないので、はっきりしたことは言えないが、独立し

た学級は、「子どもが学習しやすい」こと以上に、「教師が授業しやすい」という意識に関与するの  
であろうか。

自由記述欄では、日小において「(プレイルーム, ワークラウンジを含む)空間の取り方がよい」  
こと(7名), 「色がよい」こと(2名), K学園においては, 「壁がない(オープンであること)」  
(3名), 「曲線が多い」こと(1名)があげられており, オープン化について積極的に評価して  
いた人のほとんどが, 「子どもが学習しやすい」という項目に高い評価を与えていた。

次に, それぞれの施設について, 教師はどのような改善認識を持っているのだろうか。調査に用  
いた質問は, 次の通りである(3-3表)。

貴校の学校建築で今後どんな点を改善すべきだと思いますか。以下のうちで改 善すべきであると思う順に1, 2, …と番号をふって下さい。	
<input type="checkbox"/>	子どもにとって安全であること。
<input type="checkbox"/>	子どもが学習しやすいこと。
<input type="checkbox"/>	特別教室や運動場へ移動しやすいこと。
<input type="checkbox"/>	教師が授業しやすいこと。
<input type="checkbox"/>	教師の会議等使いやすいこと。
<input type="checkbox"/>	建物の醸し出す心理的効果など魅力的であること。
	具体的にどんな点ですか。
<input type="checkbox"/>	とくにない。
その他	

3-3表

結果は, 3-4表に示す通りである。

項目		得点							各項目に順位 をつけた 人数
		7	6	5	4	3	2	1	
		1	2	3	4	5	6	7	
O 小	子どもにとって安全に設計されていること	5 ○66	1	1					7
	子どもが学習しやすいこと		5 ○5.75	2					7
	特別教室や運動場へ移動しやすいこと	4	2 ○5.9	2			1		9
	教師が授業しやすいこと			2 ○4.3	3	1			6
	教師の会議等使いやすいこと				2 ○30	2	2		6
	建物の醸し出す心理的効果など魅力的な建物であること				1	2 ○28	2		5
	とくにない								0
H 小	子どもにとって安全に設計されていること	2 ○6.2	5	4	3	1			34
	子どもが学習しやすいこと	9	10 ○5.5	7	1	3	2		32
	特別教室や運動場へ移動しやすいこと		7	4 ○4.2	10	5	3		29
	教師が授業しやすいこと	1	11	4 ○4.9	7	8	4		29
	教師が会議等使いやすいこと		2	6	2 ○33	4	13		27
	建物の醸し出す心理的効果など魅力的な建物であること	5	7	3 ○4.9	2	6	2		25
	とくにない	1						18	7
K 学 園	子どもにとって安全に設計されていること	2 ○6.3		1					3
	子どもが学習しやすいこと	1	5 ○5.6	2					3
	特別教室や運動場へ移動しやすいこと		2 ○5.3		1				3
	教師が授業しやすいこと		1		4 ○4.3	1	1		3
	教師が会議等使いやすいこと	1				3 ○3.6		2	3
	建物の醸し出す心理的効果など魅力的な建物であること				1 ○3.5	1			2
	とくにない	7 ○7.0	3						3

3-4表 現在の施設についての改善認識

特にないということと順位をつけていない教師もいるため、統計的な判定には多少問題もあるが、順位得点を見る限り、全体として概観すると、安全性が一番高く、次に便利性（子どもが学習しやすいー移動しやすいー授業しやすいー教師の会議等使いやすい）が続く、ほぼ同じ傾向にある。

H小において、建物の魅力性について改善すべきだという意見が多いこと、K学園においては、「特にない」という項目を1位とする教師が3名いたことが特徴的である。

H小の自由記述欄には、「もっとカラーを使用して楽しくする（特に低学年）」という意見（9名）、「風通しが悪く、夏とても暑い点を改善してほしい」（4名）という意見が多くあげられていた。

施設に関する現状認識と改善すべき点についての施設認識についてまとめてみると、O小については、独立した学級に対して満足度を示した教師がいる反面、「すべてにわたって特別すぐれているとは思わない」教師も多かった。しかしながら、自由記述欄に書かれた内容をみても、「子どもにとって好ましい学校建築とはどうあるべきか」という質問に対して、他の2校に比べ「精神的に落ちつく」等の比較的漠然とした意見が多かった。なお、「精神的に落ちつく」という観点は、他の2校に比べて、学校施設に対する静的イメージが強いと言えそうである。

H小においては、学校施設に対する評価が分かれており、その理由としては、ワークラウンジについて積極的に評価するものと、風通しが悪い、吹き抜け等による騒音などについて批判的な評価をするものに分かれているためだと思われる。K学園の場合は、学校施設について、特に問題はないという教師が多いと同時に、自由記述をみると学校設備についての要求が高いことがわかった。また、体育館、プール等の要求があり、施設の量的整備の必要性をみることができる。

#### Ⅳ 学習する場のひろがりとお. S. のインパクト性について

##### (1) 学習する場のひろがり傾向

それぞれの学校における学習する場としての施設の利用状況を調べたところ、次のような結果がでた。（4-1表、4-2-①～③表）。選択肢については、O小の場合、②を除き、K学園では、②学習センター、③ルーフガーデン、④省略となっている。

4-2表の①～③を比較するとわかるように、O小に比べ、H小、K学園は、授業で教室以外の場所を使用することが多い。ただし、H小の場合もK学園の場合も、場所によって多少の違いはあるが、トータルで見ると「よく使う」「ときどき使う」という意見が、「あまり使わない」「まったく使わない」という意見より、多少多い程度であった。



校舎内のクラスルーム以外の場所で授業するのに以下にあげる場所を使ったことがありますか。それぞれ右側の選択肢のうち最もあてはまる番号にマルをつけてください。また、どんな場合に使うのかご記入ください。ただし、特別教室と視聴覚教室、体育館は、理科、家庭、図工、LL、体育等通常行われる授業以外で使用する場合を書いてください。

<H小の場合の選択肢>

① 特別教室	よく 使う 1	使と う ど き ど き 2	わあ な ま い り 使 3	使ま わっ た な い く 4
--------	---------------	----------------------------------	----------------------------------	-----------------------------------

→どんな場合に使いますか

② 視聴覚教室	1	2	3	4
---------	---	---	---	---

→どんな場合に使いますか

③ 廊下(ワークラウンジ等)	1	2	3	4
----------------	---	---	---	---

→どんな場合に使いますか

④ 体育館	1	2	3	4
-------	---	---	---	---

→どんな場合に使いますか

そ の 他

4-1表

( )内は、その項目の回答数 / 回答数 の百分率

場所別 \ 使用頻度	よく使う	ときどき 使う	あまり 使わない	まったく 使わない	総回答数
特 別 教 室	0 ( 0 )	2 ( 14 )	5 ( 36 )	7 ( 50 )	14 ( 100 )
廊 下	0 ( 0 )	0 ( 0 )	3 ( 43 )	4 ( 57 )	7 ( 100 )
体 育 館	1 ( 14 )	4 ( 57 )	0 ( 0 )	2 ( 29 )	7 ( 100 )
そ の 他	0	0	0	0	0

4-2-①表 O小学校

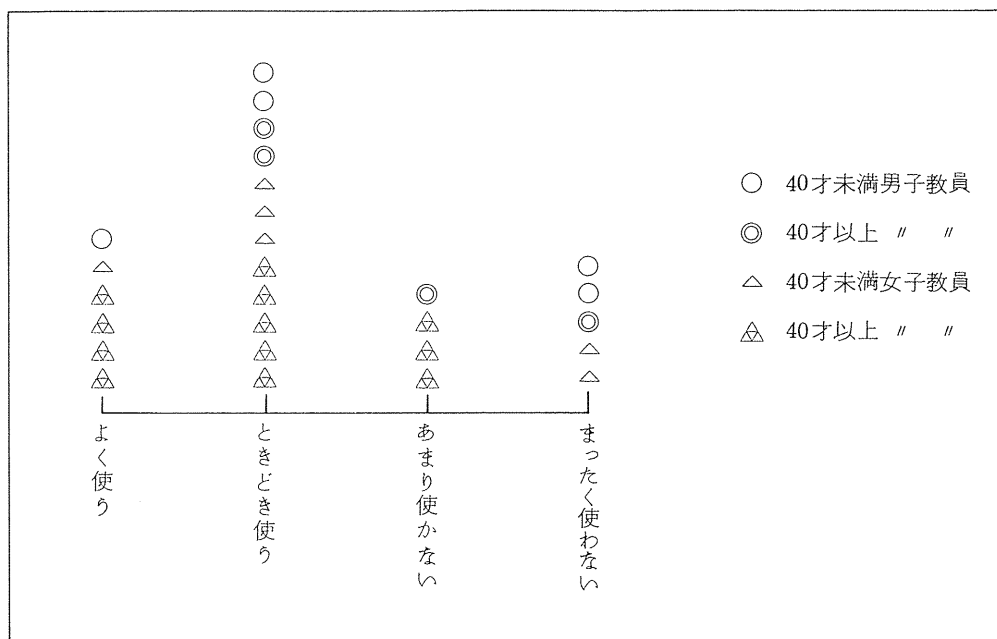
場所別 \ 使用頻度	よく使う	ときどき 使う	あまり 使わない	まったく 使わない	総回答数
特 別 教 室	5 ( 17 )	13 ( 43 )	7 ( 23 )	5 ( 17 )	30 ( 100 )
視 聴 覚 室	0 ( 0 )	10 ( 33 )	14 ( 47 )	6 ( 20 )	30 ( 100 )
廊 下 (ワークラウンジも含む)	9 ( 29 )	13 ( 42 )	4 ( 13 )	5 ( 16 )	31 ( 100 )
体 育 館	9 ( 39 )	6 ( 26 )	5 ( 22 )	3 ( 13 )	23 ( 100 )
そ の 他	1 ( 100 )	0 ( 0 )	0 ( 0 )	0 ( 0 )	1 ( 100 )

4-2-②表 H小学校

場所別 \ 使用頻度	よく使う	ときどき 使う	あまり 使わない	まったく 使わない	総回答数
特 別 教 室	1 ( 13 )	2 ( 25 )	4	1 ( 13 )	8 ( 100 )
学 習 セ ン タ ー	4 ( 44 )	0 ( 0 )	5	0 ( 0 )	9 ( 100 )
ル ー フ ガ ー デ ン	4 ( 44 )	2 ( 22 )	2	1 ( 11 )	9 ( 100 )
そ の 他	0	0	0	0	0

4-2-③表 K学 園

比較的サンプル数の多いH小において、廊下（ワークラウンジを含む）に関して解答のあった28名を個人別（性別、年齢別-40才をひとつの区切りとする）に分析してみると以下の結果（4-3表）がでた。年齢・性別によって顕著な偏りはみられないが、「あまり使わない」「まったく使わない」と答えた9名の教師について、他の項目を比較したところ、9名中2名は、特別教室、体育館をグループ学習、作業学習、統合学習によく使うと答えているが、その他の教師は、他の場所も「あまり使わない」か「まったく使わない」と答えている。



4-3表

次に、どんな場合に使用するのか、記述していただいた結果が、4-4表①~③である。

学習の場の利用状況の相違は、例えば観察をしたクラスの場合、O小では、4間×5間よりさらに大きい教室（7.20×9.90m）の中に25名しか児童がいないのに対し、H小では、8.00×8.00m

場所別	どんな場合に使用するか	
廊下	掲示物を資料にした授業	
体育館	集会（交通指導、校外学習の指導）	(10)
	国語、算数のグループ学習	(2)
	大きな工作（ダンボール使用の工作）	(2)

※ ( )は回答数

4-4-①表 O小学校

場所別	どんな場合に使用するか
特別教室	学年集会 (12) , 学友会 (4) , 学級のおたのしみ会 (1) 量のたんけん, 仲間集め等オープンシステムな学習をするとき (5) 造形的な遊び (2) } 1, 2年生 映画 (2) 統合学習 (8) 算数のゲーム (2) グループ学習 (2) 作業学習 (2) クラブ (2) } 5, 6年生
視聴覚室	統合学習 (4) 映画, スライド (16) クラブ指導 (6)
廊下 (テラス・ワーク ラウンジを含む)	理科(理科あそびや朝顔の観察)の学習 (8) 図工 (3) } 1, 2年生 グループ学習 (17) 一人調べ (9) 統合学習 (4) 作品展示発表 (4)
体育館	学年集会 (21) 統合学習 (8) 量のたんけん (2) 図工 (2) } 1, 2年生
その他	ブレイルーム . . . 近接学年との合同授業, 学年集会

4-4-②表 H小学校

場所別	どんな場合に使用するか
特別教室	教室では授業ができない場合 (2) (大声を出す等)
学習センター	調べもの(国語, 理科) (2) 雨天の時の体育 (6) つどい (2) 大きい声を出す (2)
ルーフガーデン	運動(ドッチボール, バスケット) (8) 理科の実験(空を見る等) (4) 大きい声を出す (4)

4-4-③表 K学園



習の場のひろがり傾向等により、O小の教師とH小、K学園の教師の間には、明らかな施設認識の相違があることがわかる。しかしながら、O小でも、廊下や体育館をグループ学習に使用する等、学習の場のひろがりへの芽があること、K学園、H小においてもO.S.をよく使用する教師とあまり使用しない教師等個人差があることから考えれば、その意味において、施設が教師に及ぼすインパクトも、当然ながら潜在的なオープン化要求を引き出すという意味での可能性と限界とがある。

学校施設を実際に設計する側の意識の問題としては、学校施設のインパクト性の観点は重要である。オープン化に限らず、学校施設の教育に対するインパクト性の認識が強ければ、教師の意識が低い場合でもそれなりの確信をもって、独自の設計を推進する場合もありうる。実際に、このような設計者側の意図と教師の意識とのギャップは少なからず存在するようであるが、このギャップを埋めるために、教育サイドでは、従来低いレベルにあった教師の学校施設に関する知識水準を高めること、オープン教育等に関する知見をふやすこと等必要であろう。しかしながら、作られた学校施設に教師が努力して使いこなしていくという状況には疑問をおぼえる。その意味では、前述の課題を満たした上で、基本計画段階へ教師が参加し、設計者側と協議するプロセスが重要である。

## V まとめと今後の課題

「子どもひとりひとりを生かす」ことの重要性は、共通して認識されているものの、オープン化という抵抗のある人も少なくない。また、オープンスクールといっても、従来のクローズドシステムで行われていた教育を完全に否定しているわけでもない。要するにO.S.を有する学校施設の計画は、従来のクローズドシステムにおける教育の長所をも含めた、教育方法の選択の可能性の幅をひろげたものであると解釈したい。しかしながら、O.S.を有する学校施設の計画においては、学校側からの要望によるものはほとんどなく、「行政・建築主導型が大半を占めて」<sup>(18)</sup>いる現状である。それゆえに、それに対する反発からオープン教育がなされていない例もあるという。また、教師の意見といっても教師からはほとんど意見がなく、一人二人の少数の教師が孤立しながらもオープン化を進めたという話を耳にした。アンケート調査でみるように、学校施設について不満、要求はあるものの、要求が（施設の現状認識を除いて）漠然とした状態である場合、オープン化に対して不満はあっても意見としては出しにくいのは当然である。当然のことながら、従来のマンネリ化した学校施設設計において、学校の要望は不必要であったし、学校側の要望は聞きとられなかった。しかしながら、オープンスクールも含めて学校を建築する場合には、今後の教育方法の選択可能性を可能性の範囲で終わらせないためにも、子どもの教育に専従する立場にある多くの教員の意見が重要である。こうした問題を従来のように「学級経営以前の問題」として片づけてはならない。

そこでまず、今後学校施設を建築する際には、こうした教師サイドの要求を聞くプロセスを設定することが大切である。そして、その場合、学校施設基本計画に教師が参加する際の前提課題も考慮しなければならないと思われる。

筆者が調べたケースでは、教師は所属する学校の建築状態（施設・設備の状況）をよく把握して

おり、不満や要求も多く持っている。しかし、要求の水準は、所属する学校の学校経営体制や施設水準に大きく影響を受けている。また、たとえ、O. S. を持っていて体育館やプールのない学校では、まず体育館やプールがあることが必要とされるし、設計の関係で、教室内の温度が高くなり放しの学校あるいは光の入りにくい学校では換気、採光が一大関心事である。教師の施設認識が低い、教師から施設に対する要求がでてこないという意見を聞くこともあるが、教師が現在の学校施設の改善すべき点として、共通してまず安全性を求めていることにも関連して、行政側としては、こうした量的基本的問題に対する対応しておくべきであろう。また建築サイドでも当然のことながら、使い手達が生活しやすい、また学習しやすい環境を基本的に重視すべきである。

次に、学校経営体制あるいは施設状態によって、教師の施設認識には明らかに学級の独立性を要求する閉鎖志向と多様性に富んだ壁のない空間を要求するオープン志向とでもいうべきものに分かれているのであって、このような施設認識の相違を無視して、施設レベルでのオープン化を進めていくことは、たとえ施設のインパクトが作用するとしても様々な面でギャップを生み出す原因となりやすい。閉鎖志向の学校では、教育との関連で施設のあり方を問われることは、従来の教育体制のもとではほとんど存在せず、今後の学校施設のあり方についても他の2校と比べ、漠然としている意見が多いのに対し、他の2校の場合は、一層オープン化されたO. S. への要求、具体的設備への要求と、具体的である。しかしながら、前者の場合わずかではあっても、教室以外の場へのひろがり要求はみられるのであるし、また漠然とはしていても、「精神的な落ちつき」という観点は、学校施設のあり方を考える上で重要な指摘である。「精神的な落ちつき」という観点は、O.S.を有する施設でも可能なのであるから、「行政・建築主導」でいわゆるオープン化された学校施設を作る場合でも、このような教師の施設認識のギャップを埋める努力をすべきである。また教育サイドでは、デューイがいう<sup>(19)</sup>ような「『教育上の学習とかかわる全施設設備ならびに、これを生徒の身体的な現状と福利に適合させる問題を扱う』教育物理・生理学」に類する課目を設定し、教育活動との関連で、学校施設に対する教師の認識を深めていく必要があると思われる。

本稿では、学校施設基本計画作成のプロセスへ教師が参加する場合の前提課題とでもいうようなものを、教師の施設認識の問題から考察したが、実際には、学校施設の基本計画の重要性が問われているものの、ほとんど行われていない場合が多く、本稿の考察も先だりの要素が強い。しかしながら、今後子どもの発達を保障する（子どもの教育権保障）学校施設を具現化するためには、個々の学校の教育活動において、学校施設がいかなる意味を有するのかというフィールドワーク的作業が重要になると思われる。また、研究の端緒についたばかりなので、学校建築のケース（新設校と既存校、既存校の場合でも新築、増築等の異なるケース）ごと教師参加の問題やそれらを含めた学校施設のあり方を考察するにはいたっていないが、今後、フィールドワークを続けるなかで、学校施設の位置づけと関連した学校経営の動態的把握の必要性、アンケート項目の修正、授業分析のあり方も含めた教育方法学的アプローチの必要性等、論及すべき基本的課題も多い。

<引用文献及び参考文献>

- (1) 長沢, 上野, 諸貫, 横山ら「小中学校のオープンスペースの使われ方に関する研究－オープンスペースのタイプ化と調査の視点－」 1980年度日本建築学会関東支部研究報告集
- (2) 関沢勝一「ワークスペース又はオープンスペースを持つ最近の小学校建築」  
1976, 2 No.1185 文部時報 P56
- (3) 1982年7月に発行された「学校施設の文化的環境づくりに関する調査研究会議」による『学校施設の文化的環境づくりについて』と題する小冊子P3には, 「創造性に富むとともに, 人間性ゆたかな児童生徒等の育成に資するような文化的環境をつくることを, 教育環境としての学校施設を整備するにあたっての基本のひとつとして考えたい」とある。
- (4) 宮原丈夫編「学級教育事典 学級の教室環境」 P17  
1972 帝国地方行政学会
- (5) 高久清吉「教育実践の原理」 P72  
1970 協同出版
- (6) 加藤学園, 北沢弥吉郎「オープンスクール選書1－子どもから学ぶ」 P195  
1976 明治図書  
札幌市立丘珠小学校「オープンスクール選書3－教育の壁を開く」 P20  
1977 明治図書 etc
- (7) 前掲 小冊子 P6
- (8) S市では, 小学校施設が老朽化してきたのをきっかけに, 昭和53年に,  
教育委員会関係者2名, 建築技師1名, 財政担当者1名, 小中学校の代表者4名によって「新しい教育を考える会」を作り, この人達を中心になってオープン化が進められた。現在では, 市内4つの小学校でO. S. が作られている。
- (9) 斉藤喜博全集第3巻「新しい学校づくり, 小学校」 P293～303 国土社
- (10) 新建築学大系23 「建築計画」 P26 1982 彰国社
- (11) 同書 P11
- (12) 昭和50年1月作成のものには「この『学校施設設計指針』は学校建物の建築計画の作成及び設計の実施等にあたり, 補助事業建物の設計内容等について留意すべき事項を記述したものである」と一応の位置づけがなされている。
- (13) 喜多明人「教育条件整備としての学校建築の課題－その教育法学的アプローチ」  
1979 季刊教育法34号 P131に所収
- (14) 義務教育諸学校施設費国庫負担法施行令3条第1項第1号
- (15) 建築文化 212号 P112
- (16) 長沢ら「小中学校のオープン・スペースの使われ方に関する研究－オープンスペースの使わ



れ方の発展過程と計画条件」

昭和55年9月 日本建築学会大会学術講演梗概集

- (17) 加藤学園，北沢弥吉郎「子どもから学ぶ」 1976 明治図書  
同じく 「続子どもから学ぶ」 1979 明治図書  
全私学新聞 1979，12，13日号  
建築文化 1972，10月号 №3112 彰国社  
加藤学園学校関係者の話等を参考
- (18) 長沢ら「小中学校のオープンスペースの使われ方に関する研究－オープンスペースのタイプ化と調査の視点」  
1980 日本建築学会関東支部研究報告集
- (19) デューイ著 速藤昭彦，佐藤三郎訳  
「実験学校の理論」 P138～P143に所収 1977 明治図書  
デューイが，シカゴ大学学長の諮問に答申する形で，1897年1月8日付の書簡に同封した文書

<子どもにとって好ましい学校建築とは——自由記述の結果>

<p>具体的な建築のあり方を述べたもの</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 採光，風通しの良好な向きに作られていること (3)</li> <li>• 防音設備が整っていること</li> <li>• 学習用具の整備，出し入れが能率的に行われる作りであること</li> <li>• じゅうたん</li> </ul>
<p>教育的な、抽象的な観点から述べたもの</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 安全であり落ちついて学習できる環境であること (3)</li> <li>• 精神的に落ちつく (3)</li> <li>• 子どもの管理が一目で出来ること</li> </ul>
<p>教育的な意見と建築的な条件を関連させて述べたもの</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• グループ等の活動，読書等で使える</li> <li>• 学級人数にあわせて心理的なゆとりをもてる } 広さ</li> <li>• 明るい廊下</li> <li>• すべらない床</li> <li>• 精神的に落ちつく { 床 色彩 壁</li> </ul>

< O 小学校 >

<p>具体的な建築のあり方を述べたもの</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 通風，換気がよい ( 8 )</li> <li>• 広いスペースがほしい ( 3 )</li> <li>• 教室の可動壁 ( 2 )</li> <li>• 出入口を多くしてほしい ( 2 )</li> <li>• 壁は木の方がよい ( 2 )</li> <li>• きれいな色彩</li> <li>• 十分な特別教室数</li> <li>• // 体育館数</li> <li>• 2階，3階から直接外へ出られる</li> <li>• 棚，ロッカーがあつて用具の整理が可能なこと</li> <li>• 彩光がいい</li> <li>• 低高分離</li> </ul>
<p>教育的な観点から述べたもの</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 安全第1 ( 7 )</li> <li>• 明るい雰囲気 ( 5 )</li> <li>• 楽しく学習できる ( 2 )</li> <li>• 夏涼しく，冬暖かであること ( 2 )</li> <li>• 多様性 ( 2 )</li> <li>• 用具の整理が可能であること</li> </ul>
<p>教育的な意見と建築的な条件を関連させて述べたもの</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 児童がのびのび活動できる</li> <li>• 教師から教えこまれるのではない自分から学ぶ資料コーナーのある</li> <li>• 多様性のある</li> <li>• 楽しく学習できる</li> <li>• 使いやすく明るい雰囲気のある</li> <li>• 自由に機器を動かせる</li> </ul> <p style="text-align: right;">} 広いスペース</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 安全第一のために { 出入口を広くする ( 3 ) コンクリートの地肌はよくない</li> <li>• 木の作りのほうが { 体によい あたたかい</li> <li>• 子どもの立場にたった生活をする環境を大切にするために { 通風，換気をよくする トイレをそろえる 履き物入れをそろえる</li> <li>• 色彩をきれいにして { 明るい雰囲気を出す 子どもへの心理的影響を大切にする</li> <li>• 運動するチャンスを増やすために，2階，3階から直接外へ出られるようにする</li> </ul>

< H 小学校 >

<p>具体的な建築のあり方を述べたもの</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 通気性がいいこと (2)</li> <li>• 仕切りがなく広いこと (2)</li> <li>• 出入口が広いこと</li> <li>• 体育館，プールがあること</li> <li>• 洗面所，トイレが十分あること</li> <li>• 水が各所で使えること</li> <li>• 特別教室へ行く必要のない教室</li> <li>• 整理庫，倉庫のあること</li> </ul>
<p>教育的な、抽象的な観点から述べたもの</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 子どもの活動、動き、生活にあわせて工夫をしたい</li> <li>• 明るい (3)</li> <li>• 安全 (3)</li> <li>• 小動物・生き物の飼育，植物，大きな木，草花栽培等しやすい環境，施設設備が整っていること</li> </ul>
<p>教育的な意見と建築的な条件を関連させて述べたもの</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 明るい雰囲気を作る為に       <ul style="list-style-type: none"> <li>南向きにする</li> <li>彩光を工夫する</li> </ul> </li> <li>• 全てが学校教育の場だから，教師は，いつも一緒にいるべき，ゆえに職員室はいらない</li> <li>• 子どもが何かを考えようとする時，手助けとなるものがどこにあるかわかるような配置の</li> <li>• 目的に応じ自由に家具，その他で仕切ることができる</li> <li>• 教材教具が壁に埋め込み式になって，有効に面積が使用できる</li> </ul> <p style="text-align: right;">} 教室</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 階段，スロップが学習の場として利用でき，立体的に，創造的に活用できること</li> </ul>